

# 山と博物館

第45巻 第9号 2000年9月25日 市立大町山岳博物館

特別展「清流に泳ぐ 大塚浩司 手作りの魚たち」

10/7(土)~11/12(日)



イワナ

大塚 浩司 作

「博物館内の壁いっぱいに、手作りの渓流魚を泳がせてみたら面白いだろうな。」

山岳に関する絵画や写真を中心の博物館にとつては、異例ともいえる企画をもちかけたのは5年前でした。話を聞いていただいた担当の方も、最初は「はあ、魚ですか?」と困惑気味。二〇世紀最後の個展は博物館でやろうと勝手に決め込んでいた僕は、ここで諦める訳にはいきません。山と川の関係は、切っても切れないものであるとか、ここ大町の清流に棲息するイワナやヤマメの話しなどを熱く語り、前代未聞の作品展が開催されることとなりました。

蛇口をひねればいくらでも水が出る時代に生きている僕たちは、川や湖との関わりも希薄になり、その大切さを認識しないまま過ごすことがほとんどです。コンクリートで固められた川の痛みを理解できる人は、いったい何人いるのでしょうか。

信州は山紫水明の地といわれ、清らかな水の流れは県民の自慢であり、命の源でもあります。清流という限られた環境にしか棲息できないイワナやヤマメを作品にして展示することで、川や湖の自然の大切さを考え直すきっかけになればいいなど願っています。

(クラフト作家)

開催にあたつて

大塚 浩司

## 特別展「清流に泳ぐ 手作りの魚たち」

大塚 浩 司

まずは自己紹介

博物館で作品展ができるなどということは、作家として名誉なことであり、一生のうちに二度とないことだとも思つて、しっかりと自己PRします。

名前は大塚浩司。よく「おつかこうじ」と読まれてしまうのですが、「ひろし」です。白馬村で小さなクラフトショップ「森の生活」という店を経営しながら、作品製作をしています。

一九六〇年大阪生まれ、十二才の時に白馬に引っ越ししてきましたので、もう二八年間信州で暮らしています。小さい時から絵を描いたり物を作ることが大好きで、漫画家か絵描きに夢見ていました。高校を卒業してからは家業を手伝いながら、美大の通信教

育でデザインを学び、自作のイラストや漫画を雑誌に投稿していました。

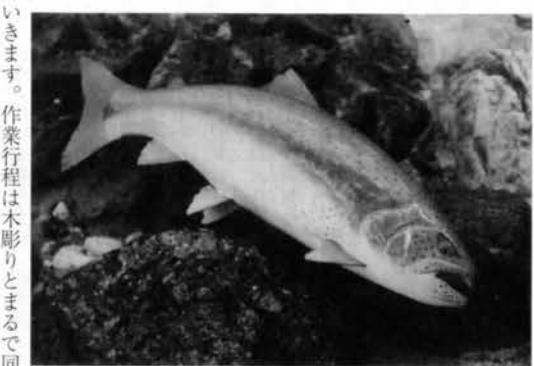
十九歳の頃、漫画やイラストが入選したりして、ほんとうに仕事としてやっていくようになりました。しかし、東京に出ないと一人前になれないといわれた時代でしたので、信州を離れなくなかった僕は、この地でもやつていけるクラフト作家の道を選んだのです。

あれから二〇年、「信州の自然からインスピレーション」を受けて作品を作る」というのが僕の作家としてのテーマですから、木工やドライフラワー、絵や版画、彫刻など、ジャンルにとらわれずには作品製作を続けています。

溪流魚の作品を作り始めてからは一〇年ぐらいでようか。アメリカの釣り雑誌に載っていたトラウト（マス）の置物に心奪われ、見よう見ま似的で作ったのがきっかけです。

とにかく溪流釣りが大好きです。釣りの専門書誌に執筆していたこともあるくらいイワナやヤマメに惚れ込んでいたので、作品製作には今まで以上に真剣に取り組みました。最初は趣味として始めたのですが、今では仕事の中心になっています。おととしあたりからフライフィッシング（毛鉤釣り）の本場であるアメリカやニュージーランドでも常設展示されるようになったのは嬉しい限りです。

アメリカが発祥の地といっていいフィッシュカービング（魚の彫り物）ですが、日本では、魚物を作るプロの作家はまだ数人しかおりません。信州でも数人の方が作り始めていますが、まだまだ一般的なクラフトのジャンルではないようです。僕もこの道を行く作家として、よりよい作品作りに励みたいと思います。



### 作品について

前述のように、僕は溪流釣りが大好きなので、馴染みのあるイワナやヤマメ、アマゴの作品数が一番多くなります。テンカラと呼ばれる和式毛鉤釣りをしているので、魚の動きや餌の追いかげ方などを長年に渡り観察してきました。また、水槽で渓流魚を飼い続けたこともあります。

制作する時には、実物の魚その物を表現するのではなく、出来る限りディフォルメして、本物以上の動きや迫力を出そうと努力しています。ですから全長に対する各部の大きさ、長さなど、実物の魚のサイズを測ることはしません。ヒレの大きさや口のあけ方も、作品により大きくしたり小さくしたりと工夫します。魚の複製品を作ることに、意義があると考えています。

アメリカインディアンとの交流 突然なんの話しかと思われるでしょうが、小さい頃からもう一つの夢が、アメリカインディアンとともに生きることでした。いていましたが、木では作品の表現に限界を感じ、現在は造形用の石膏粘土と呼ばれるものを使っていました。大まかな形を作り、完全乾燥させてから、ナイフや彫刻刀で彫りこんできた白人がいうような、悪い人であるはず

### で

であります。作業行程は木彫りとまるで同じ

です。彫り終えた物にジエッソという下地を塗りこみ、アクリル絵の具で色をつけ、ウレタンニスで仕上げます。下地から仕上げ塗りまでは、七〇工程以上の作業を要します。出来上がった作品はすべて一点もの。同じ作品はどこにもありません。

今までに二〇〇〇点以上製作しましたが、やつとここ二~三年の作品に、自分らしさというか、オリジナリティーが出てきたように思います。

作品を見ていただいた方に「とてもリアルですね」といっていただける様に努力を続けます。

アメリカインディアンとの交流 突然なんの話しかと思われるでしょうが、小さい頃からもう一つの夢が、アメリカインディアンとともに生きることでした。たぶん西部劇の影響でしょう、馬にまたがり荒野を駆ける彼らの姿に憧れたのです。古くから自然と共に暮らす彼らが、後からやつてきました白人がいうような、悪い人であるはず





# イヌワシ飼育奮闘記（後編）

横澤志津

平成二年九月下旬、彼らは二年目の繁殖期を迎えるとしていました。私たちは彼らが巣作りをするための巣材を集め、巣台に置きました。巣材は木の枝とスキです。その後、オスはすぐに巣材に興味を持ち始めましたが、メスの方はといえば夏の間にすっかり地面生活に戻つてしまっていたのです。餌を持って入ると、待つてましたばかりに餌台にやつてくるメスに、色気より食い気を感じてしましました。（「まったく、もう…」私のつぶやきです）。

一月に入ると、オスは本格的に巣作りを始めました（それがちゃんと形になつていてかどうかは別としてですが）。そして、一ヶ月も中旬にさしかかると、メスに変化が現われ始めたのです。餌を持って入る私たちに対して、頭羽を逆立て体を膨らませて威嚇してきます。これは明らかに前年とは違う行動でした。はたしてそれが何を意味するのかは分かりませんが、メスの気持ちに変化があったことは間違いないことのようです。

しかし、この年は一月になつてオスが一段と激しく鳴くようになつても、メスは地面にいました。メスもオスのいる巣台へ行こうとしているようなのですが、羽の力がないのかもう少しというところで失敗してしまった。私たちも真剣にメスを上にあげる方法を考えたりもしました。オスは上からしきりにメスを呼ぶ、そんな状態が毎日毎日続いていました。

前年の一月には中段にあがつてメスでしたが、この年メスの姿がモニターに映つたのは三月になつてのことでした。それからのメスは、よくオスと一緒にいました。羽を引つ張つてみたり、脚をつついでみたり、一緒に巣材をいじつてみたり。モニターには仲のよい二羽の姿が映っていました。また、メスが巣台から離れていると、オスがしきりに呼ぶ様子も見られました。メスもその声に反応して巣台に戻ります。これは前年には見られなかつた行動です。さらには、巣台にいるメスの元へオスが餌を持って行ってあげる姿も見られました。餌を持って飛んで行き、メスの前にポツッと置いて、自分の分はまた取りに行くのです。ほのぼのとした、見ている方まで和んでしまうような、そんな光景でした。

こんなに仲のよい二羽でしたが、本来の目的である繁殖の方にはなかなか変化が見られませんでした。オスが一生懸命やつてている巣作りも全然形が見えてきません。メスの後ろに回つてみたりするものの、そこから進展しないのです。メスが巣台に行くようになつたのが三月になつてのことですから、もう遅かったのでしよう。私たちの間であきらめの雰囲気が漂ってきたのは、四月に入りオスが巣から離れるようになつてきた頃です。相変わらずメスに餌を運んだりしている姿も見られましたが、オスが巣を捨ててしまつた以上、もうどうしようもありません。今年も彼らの二世の姿を見ることはできませんでした。

平成二年八月二〇日、イヌワシのメスが死亡しました。上記の記事を書いたすぐ後のことです。あまりにも突然のこと、私たちには信じられない気持ちでいっぱいでした。

今年、私たちは今までよりも彼らの繁殖に期待していました。今までよりも早い時期から、メスが威嚇をしてきたり、オスの鳴き声が聞えてくるようになったり、「一月頃の繁殖期突入に向けて、とてもいい感じになつてきていたからです」。

死亡する前日もメスは普段と全く変わらない様子で餌台の上に止まつていて、餌を持って入った私に頭羽を逆立て、体を大きく膨らませて威嚇してきました。私などはメスのそういう態度を見つめ、「やれやれ」と言いつつも、自分を区別してくれていることに実はちょびり喜んでいました。そして二〇日の朝、出勤した飼育員が地面に倒れているメスを見ました。全く予想もしていなかつただけに言葉を失いました。

メスの死体は翌二二日に松本家畜保健衛生所に依頼し、解剖検査を行つていただきました。その結果、死因は「内臓真菌症」と診断されました。これは、体が衰弱したことにより、体内に入つたカビに抵抗できず、カビが内臓で繁殖してしまうというものです。体が弱つてきていたのかもしれないと思うと、気づいてやれなかつたのが悔やまれ、安らかに眠つて欲しいと祈るばかりです。

現在はオスが一羽残されていますが、このオスも近々仙台市八木山動物公園に帰る予定です。メスがいなくて寂しそうな彼ですが、また仙台に戻つて元気に過ごして欲しいと思います。



（写真は八月二五日撮影）

全てが手探り状態で、繁殖例のある動物園などにいろいろ教わりながら始めたイヌワシ繁殖計画です。よく「愛のキューピッド」といいますが相手は動物、なかなかうまくいきません。しかし、二羽の様子を見ている限りでは、年を重ねることにいざな氣になつてきているようです。繁殖期になると一般公開を中止し、迷惑をおかけしておりますが、多くの皆さんの協力に感謝しつつ、彼らのいぢらん近くにいるものとして、できる限りのことをしていきたいと思つています。オスが来てからのメスは随分変わりました。初めはオスより小柄だった体も今ではオスと同じくらい、いやオスより大きくなつたかも知れません。飛ぶことも多くなり、餌もたくさん食べるようになりました。オスが来たことはメスにとって大きなメリットであったと思いま

（大町山岳博物館 動物飼育担当職員）

山と博物館 第45巻 第9号  
発行 平成二〇〇〇年九月二十五日発行  
長野県大町市大字大町八〇五六一  
市立 大町山岳博物館

TEL〇二六一-二三一〇二二一  
FAX〇二六一-二二一〇二二三三  
郵便振替口座番号〇五四〇-七一三五三  
定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）  
もうどうしようもありません。今年も彼らの二世の姿を見ることはできませんでした。